

解題

全唐詩逸

三卷

市川世寧著

此の書は、全唐詩に漏れ我邦に傳はりたる詩のみを搜索蒐輯せしものなり、著者の傳は、本叢書第二卷「談唐詩選」の解題に見へたり、文化紀元春三月發兌江湖詩社藏版）

焉而彼之墜其傳已久則東方之善於守也豈徒有唐之詩云耶。

文化新元秋八月

述齋林衡撰

河三亥著

全唐詩逸舊序

大清康熙之朝，全唐詩集成，其人以千計，其詩以萬計，雖片章隻句，散在諸書者，採掇無遺也，不謂盛且備乎，殊不知尚逸而在吾口本，亦不爲少也，當時遺唐之使，留學之生，與彼其墨客韻士，肩相比，臂相抵，則其研唱嘉藻，記其所口，臆其所記，裝以歸者，蓋比比不已，大江維時之千載佳句，的的珠璣，獲其片而逸其全，雖則可惜哉，其所以亡乎彼而存乎我，不亦幸乎，上毛河子靜有慨於此也，著全唐詩逸三卷，夫然後所謂滄海無遺珠者，非耶，大抵典籍之亡於彼而存於我者，在佛書太多，然不廣行世，近世太宰氏所按古文孝經，流入西華，新安鮑廷博再刻而行之，作序賞之，今使斯書亦流而西，則豈復不刮目而觀之哉，子靜名世寧，爲昌平學都講，博雅尙志，亦嘗著

日本詩紀五十卷其有功于藝文不獨斯書云。

天明八年戊申十月

淡海 竺常 撰

全唐詩逸舊序

大清康熙之朝，全唐詩集成，其人以千計，其詩以萬計，雖片章隻句，散在諸書者，採掇無遺也，不謂盛且備乎，殊不知尚逸而在吾口本，亦不爲鈔也，當時遺唐之使，留學之生，與彼其墨客韻士，肩相比，臂相抵，則其研唱嘉藻，記其所口，臆其所記，裝以歸者，蓋比比不已，大江維時之千載佳句，的的珠璣，獲其片而逸其全，雖則可惜哉，其所以亡乎彼而存乎我，不亦幸乎，上毛河子靜有慨於此也，著全唐詩逸三卷，夫然後所謂滄海無遺珠者，非耶，大抵典籍之亡於彼而存於我者，在佛書太多，然不廣行世，近世太宰氏所按古文孝經，流入西華，新安鮑廷博再刻而行之，作序賞之，今使斯書亦流而西，則豈復不刮目而觀之哉，子靜名世寧，爲昌平學都講，博雅尙志，亦嘗著

全唐詩逸序

彼西之邦異姓迭興革命遞運至於制度文爲必備一代之典非不
 隆且盛焉而舊物之失傳亦此之由惟我東方則不然百王一姓日
 月悠久風淳俗朴事皆師古故不特不失我之舊而彼之入于我者
 亦因以傳矣蓋彼文而長於創我質而善於守是以竟其不同也近
 時康熙之主窮區夏之力傾朝野之藏分授詞臣編摩會粹鉅典鴻
 冊層見複出而其編全唐之詩也亦得詩四萬八千九百餘首可謂
 盛矣而不知尙有遺落存于東方者子靜之有斯撰蓋將以補其闕
 也然是編亦惟出一時之摘錄非有窮年糜日殫力專心而後成如
 使子靜窺祕府探石室假以歲月擲撫不止則寧止匱匱如斯而已
 乎哉抑又思我禮樂輿服資漢魏而參隋唐者今皆見存烜赫可觀

中冊

- | | | | |
|--------------------------------|--------|--------|--------|
| 羅虬 二一 | 溫庭筠 二〇 | 方干 二〇 | 羅隱 二一 |
| 賈島 二〇 | 杜荀鶴 二一 | 神穎倫 二一 | |
| 惠文太子 二三 | 元兢 二四 | 馬總 二四 | 胡伯崇 二五 |
| 高鶴林 二五 | 朱千乘 二六 | 清觀僧 二六 | 陳閔 二六 |
| 李堪 二七 | 崔致遠 二七 | 金立之 二八 | 金可紀 二九 |
| 莊翽 <small>以下 無考</small> 三〇 | 陸翬 三〇 | 何玄 三〇 | 裴公衍 三一 |
| 蘇替 三二 | 路半千 三二 | 賀蘭暹 三二 | 傅溫 三三 |
| 曹戩 三四 | 陳素風 三四 | 唐樞 三五 | 溫達 三五 |
| 盧條 三六 | 崔行檢 三六 | 陳上卿 三六 | 王幹 三六 |
| 樊寔 三七 | 張殷衡 三七 | 殷穆 三七 | 解叔祿 三七 |
| 石殿 三八 | 張野人 三八 | 衛填 三八 | 虞構 三八 |
| 崔幢 三八 | 李淮 三九 | 金雲卿 三九 | 楊郁伯 三九 |
| 李伯良 三九 | 林逢 三九 | 長孫鑑 四〇 | 戴逵 四〇 |

豆盧岑 四〇

沈寧 四〇

李許 四一

顧効古 四一

盧巽 四一

李潭 四一

鄭明 四二

王有初 四二

周存孺 四二

張牙 四二

鄭師冉 四三

章儼 四三

崔建 四三

朴昂 四三

郢展 四三

章振 四四

漢皓 四四

道彥 四四

冀金 四五

子泰 四五

紹伯 四五

郁回 四五

季方 四五

李侍御 以下失名 四六

陸侍御 四六

盧秀才 四六

真玄僧 以下 四六

真幹 四七

久則 四七

去奢 四七

良人 四七

宋休 四七

清閑 四八

靈業 四八

大閑 四八

奉蚌 四八

下冊

無名氏 五一

遊仙窟詩 五七

李嶠附 六四

全唐詩逸 上冊

日本上毛河世寧纂輯

男 三 亥 技

明皇帝

送日本使 日本高僧傳云、天平勝寶四年、藤原清河爲遣唐大使、至長安、見玄宗、玄宗曰、聞彼國有賢君、今觀使者、趨揖有異、乃號日本爲禮儀君子國、命是衡、導清河等、觀府車及三教殿、又圖清河貌、納於於春殿中、及歸賜

詩。

日下非殊俗、天中嘉會朝、念余懷義遠、矜爾畏途遙、漲海寬秋月、歸帆駛夕鷗、因驚彼君子、王化遠昭昭。

賜新羅王 東國通鑑新羅紀、唐天寶十五年、遣使朝、帝于劉、帝親製

全唐詩逸上冊

明皇帝

日本の使を送る 日本高僧傳に云く、天平勝寶四年、至つて玄宗に見ゆ、玄宗曰く、聞く彼の國賢君有り、今、使者を觀るに趨揖異有り、乃ち日本を號して禮儀君子國と爲し、是衡に命じ清河等を導いて府車及び三教殿を觀せしむ、又清河の貌を圖して春殿中に納る、歸るに及んで詩を賜ふ。

日下殊俗に非ず、天中嘉會の朝、余を念うて義に懐く遠く、矜む爾が途の遙かなるを畏るを、漲海秋月寛かに、歸帆夕鷗に駛す、因つて驚く彼の君子、王化遠くして昭々。

新羅王に賜ふ 東國通鑑新羅紀に、唐の天寶十五年、使を遣して帝に朝す、帝親ら十

十韻詩、手札賜、王曰、新羅王歲傳、
朝貢、克踐、禮樂名典、賜詩一首、其詩曰、

四維分景緯、萬象含中樞、玉帛遍天下、梯杭
歸上郡、緬懷阻青陸、歲月勒黃圖、漫漫窮地
際、蒼蒼連海隅、與言名義國、豈謂山河殊、使
去傳風教、人來習典謨、衣冠知奉禮、忠信識
尊儒、誠矣天其鑒、賢哉德不孤、旌旄同作牧、
厚貺比生芻、益重青青志、風霜恆不渝。

德宗皇帝

句

見大江雜時千載佳句、○家藏千載
佳句、二百年前、隱本、誤謬脫落甚多、
而無他本可比較、今所
分注、且存其疑、後效此。

玉殿笙歌宜此夜、更看明月照高樓、秋夜

楊師道

採蓮

見千載
佳句。

採蓮江浦覓同心、日暮風生江水深、莫言花

韻詩を製し、手札王に賜ふて曰く、新羅王歲に朝貢
を併し克く禮樂名典を感むを嘉すと、詩一首を賜
ふ、其詩に曰く。

四維景緯分れ、萬象中樞含む、玉帛天下に遍く、梯杭上郡
に歸る、緬懷青陸を阻て、歲月黃圖を勒す、漫漫地の際を
窮め、蒼々海隅に連る、與言名義の國、豈謂はんや山河
の殊なるを、使去つて風教を傳へ、人來つて典謨を習ふ、
衣冠禮を奉ずるを知り、忠信儒を尊ぶを識る、誠なり天
其れ鑒る、賢なるかな德孤ならず、旌を擁して同じく牧
と作り、貺を厚うして生芻に比す、益、重んず青々の志、風
霜恆に渝らず。

德宗皇帝

句

大江雜時の千載佳句に見ゆ、○家に千載佳句を藏
す、二百年前の隱本なり、誤謬脫落甚だ多し、而し
て他本の比較す可きもの無し、今分注する
所、且らく其の疑ひを存す、後此に效へ。

玉殿笙歌此夜に宜し、更に看る明月の高樓を照すを、秋夜

楊師道

採蓮

千載佳句
に見ゆ。

蓮を江浦に採つて同心を覓む、日暮風生じて江水深し、

重船應沒、自解凌波不畏沈。

上官儀

句 以下、並見釋空海文鏡秘府論。

曙色隨行漏、早吹入繁筵、旗文榮桂葉、騎影
拂桃華、碧潭寫春照、青山籠雪花。論云、此六句、犯長擱

病。

池闢風月清、間居遊客情、蘭泛梅中色、松吟

絃上聲。此四句犯長解盤病。

張諤

句 以下、並見千載佳句。

天上姮娥遙解意、偏教月向踏歌明。月夜美人踏歌
既、共待山頭明月上、照君行棹出長川。既、山月送

九百

丁仙芝

全唐詩逸上卷

言ふ莫れ花重うして船應に沒すべしと、自ら解す波を凌いで沈むを畏れず。

上官儀

句 以下、並びに釋空海の文鏡秘府論に見ゆ。

曙色行漏に隨ふ、早吹繁筵に入る、旗文桂葉を榮り、騎影桃華を拂ふ、碧潭春照を寫し、青山雪花を籠む。論に云す、此の六句、長擱盤病を犯す。

池闢風月清し、間居遊客の情、蘭は泛ぶ梅中の色、松は吟す絃上の聲。此四句長解盤病ヲ犯ス。

張諤

句 以下、並びに千載佳句に見ゆ。

天上の姮娥遙かに意を解し、偏に月をして踏歌に向つて明らかたらしむ。月夜美人の踏歌を見る。共に待つ山頭明月の上るを、君が行棹を照らして長川を出づ。山月を照んで、百九を送る。

丁仙芝

句

雨鳴鴛瓦收炎氣、風卷珠簾送曉涼。時岐王宅送

殷遙

句

歸心靜對螢飛月、遠夢長驚角滿樓。夏晚懷

王維

句

自恨開遲還落早、縱橫只是怨春風。牡丹花

李頎

句

巴路千山秋水上、江村獨樹夕陽時。歸至舊任開食

贊府見贈。

王昌齡

旅次盤屋過韓士別業。以下並見王昌齡府論引。

句

雨は鴛瓦に鳴つて炎氣を收め、風は珠簾を卷いて曉涼を送る。岐王宅の宴に陪す。

殷遙

句

歸心靜かに對す螢月に飛ぶ、遠夢長く驚く角樓に滿つ。夏晚懷を懷ふ。

王維

句

自ら恨む開くこと遅く還た落つること早きを、縱橫只是れ春風を怨む。牡丹花

李頎

句

巴路千山秋水の上、江村獨り樹つ夕陽の時。歸つて舊任に到り、其贊府の贈り。

王昌齡

盤屋に旅次して韓士の別業に過る。以下並びに王昌齡が府論引。

詩格

春烟桑柘林、落日隱荒墅、決瀆平原夕、清吟久延佇、故人家於此、招我漁樵所。格云、此第五句入作勢。

上侍御士兄

天人俟明路、益稷分堯心、利器必先舉、非賢安可任、吾兄執嚴憲、時佐能釣深。同上

上同州使君伯

大賢本孤立、有時起絲綸、伯父自天稟、元功載生人。此第三句入作勢。

留別

桑林映陂水、雨過宛城西、留醉楚山別、陰雲暮霽上。同上

贈李侍御

青冥孤雲去、終當暮歸山、志士杖苦節、何時

詩格を引けるに見ゆ。

春烟桑柘の林、落日荒墅に隱る、決瀆平原の夕、清吟久しく延佇す、故人家に於て、我を招く漁樵の所。格に云ふ、此の第五句入作勢。

侍御士兄に上る

天人明路を俟ち、益稷堯心を分つ、利器必ず先づ舉ぐ、賢に非ずんば安んぞ任す可けん、吾兄嚴憲を執る、時佐能く深を釣る。同上

同州使君伯に上る

大賢本孤立し、時有時て絲綸を起す、伯父自ら天稟、元功生人を載す。此第三句入作勢。

留別

桑林陂水に映じ、雨は過ぐ宛城西、留まつて醉ふ楚山の別れ、陰雲暮に霽々。同上

李侍御に贈る

青冥孤雲去る、終に當に暮に山に歸るべし、志士苦節に

見龍顔比興、入

又

渺然客子魂、倏隳川上暉、還雲慘知暮、九月

仍未歸同上

送別

春江愁送君、蕙草生氤氳、醉後不能語、鄉山

雨雰雰合思、帶句勢

失題

時與醉林壑、因之墮濃桑、槐煙漸含夜、樓月

深蒼茫景勢、理入

又

桑葉下墟落、鷓鴣鳴渚田、物情每衰極、吾道

方淵然景入、理勢

句

杖、何の時か龍顔に見えん比興、入

又

渺然客子の魂、倏ち隳す川上の暉、還雲慘として暮るる

を知る、九月仍未だ歸らず同上

送別

春江愁ひて君を送る、蕙草生じて氤氳、醉後語ること能

はず、郷山雨雰々合思、帶句の勢

失題

時に與に林壑に酔ふ、之に因つて濃桑に墮つ、槐煙漸く

夜を含む、樓月深うして蒼茫景勢、理入

又

桑葉墟落に下り、鷓鴣渚田に鳴く、物情毎に衰極、吾道方

に淵然景入、理勢

句

崔曙

句見秘府論。

夜臺一閉無時盡逝水東流何處還題失田家

收已盡蒼蒼只白茅題失

李白

句見千載佳句。

玉堦一夜留明月金殿三春滿落花題

張謂

題故人別業見秘府論。

平子歸田處園林接汝濱落花開戶入啼鳥

隔牕聞池淨流春水山明斂霧雲畫遊仍不

厭乘月夜尋君。

李嘉祐

句見千載佳句。

崔曙

句秘府論に見ゆ。

夜臺一たび閉ちて時の盡くる無く逝水東流して何れの處にか還る失田家收めて已に盡くし蒼々只だ白茅題失

李白

句千載佳句に見ゆ。

玉堦一夜明月を留め金殿三春落花滿つ。題

張謂

故人の別業に題す。秘府論に見ゆ。

平子歸田の處園林汝濱に接す落花戸を開て入り啼鳥牕を隔て聞ゆ池は淨くして春水を流し山は明らかにして霧雲斂る畫遊仍厭かず月に乘じて夜君を尋ぬ。

李嘉祐

句千載佳句に見ゆ。

巴峽猿聲催客淚、銅梁山翠入江樓。江晚階、猿聲、
千峰鳥路含梅雨、五月蟬聲送麥秋。發青泥店、至長

余縣西
涇山口。

錢起

失題 見秘府論、按、下二句、即郭震塞上
詩中語、此以錢起詩未詳、何據。

胡風迎馬首、漢月學蛾眉、久成人將老、長征
馬不肥。

顧況

句 以下卷末二十九
句、並見千載佳句。

野人誤向人間老、爲謝金華洞裏雲。寄婺州
趙使君、
莫言歸去無人伴、自有中天月正明。送朱
拾遺。

陳潤

句

兩岸楊花風作雪、一池荷葉雨成珠。題山陰
朱徵君

巴峽猿聲客淚を催うす、銅梁山翠江樓に入る。江晚階、猿
聲を記す、
千峰鳥路梅雨を含む、五月蟬聲麥秋を送る。青泥店を發し
て長余縣西涇
山口に
至る。

錢起

失題 秘府論に見ゆ、按ずるに下二句は即ち郭震、塞
上の詩中の語、此以て錢起の詩と爲す、未だ何
に據るを詳かにせず。

胡風馬首を迎へ、漢月蛾眉を學ぶ、久成人將に老いんと
す、長征、馬肥えず。

顧況

句 以下卷末に至る二十九人
句、並びに千載佳句に見ゆ。

野人誤つて人間に向つて老ゆ、爲めに謝す金華洞裏の
雲、婺州の趙使
君に寄す、言ふこと莫れ歸去人の伴ふ無しと、自ら中
天月正に明かなる有り。朱拾遺を
送る。

陳潤

句

兩岸の楊花風、雪を作す、一池の荷葉雨、珠を成す、山陰の
朱徵君

隱居、暮猿啼處三聲絕、寒鴈歸時一葉秋、客舍石已
山波、一雙淚滴黃河水、願得東流入漢宮。王昭君。

崔膺一作膺

句

不隨暮雨蒼江去、且向朝雲白雪歌、歌欲干

北闕辭蒼海、卻望東山愧白雪。別山居。

馮宿

句

九衢車馬傳佳句、萬戶鶯花接勝遊。上人。

于鵠

句

會讀列仙王母傳、九天未勝此中遊。上陽宮。

楊巨源

隱居の隱居、暮猿啼く處三聲絶え、寒鴈歸る時一葉の秋、客舍石已
山波、一雙の涙は滴る黃河の水、願くば東に流れて漢宮に
入るを得ん。王昭君。

崔膺一に膺
に作る。

句

暮雨に隨つて蒼江に去らず、且つ朝雲に向つて白雪を歌

ふ、歌北闕を干さんと欲して蒼海を辭す、卻つて東山を
望んで白雪に愧づ。山居に別る。

馮宿

句

九衢の車馬佳句を傳へ、萬戶の鶯花勝遊に接す。上人に關ゆ。

于鵠

句

會て讀む列仙王母の傳、九天未だ此中の遊に勝らず。上陽宮。

楊巨源

句

鳴鞭秋色詩情遠、拂匣寒花劔力多、和劉員外、外赴闕
次、流籍通遼闕秋光遍、詩答蓬山晚思遙、永平里、永
關、作、青門日暖塵光動、紫陌花晴風色來、春
風、洪、豔欺藤蔓鶯無限、香壓荊花蝶不飛、紫
內史舊山空日暮、南朝古木向人秋、將、赴、嶺、外、留、別、夢中
鄉、信、驚秋鴈、總下林聲帶夜蟬、居、獨向曉山
知、露濕遼臨秋水愛雲明、送、王、秀、才、新河柳色千
株、暗、故國雲帆萬里歸、送、楊、松、陵、歸、宋、汴、州、一院綠錢
童、子、拂、千竿青玉主人栽、寄、宣、露凝丹地初
疑、雨煙著紅樓、半、是、霞、空門水定
埃、塵、遠、眞偈金書世界稀、明、金、字、經、供、

劉禹錫

全唐詩逸上冊

句

鳴鞭秋色詩情遠、匣を拂ふ寒花劔力多し、劉員外、關に赴
るの作に籍は遼闕に通じて秋光遍く、詩は蓬山に答へて
和す、籍は遼闕に通じて秋光遍く、詩は蓬山に答へて
宛思遙かなり、青門日は暖かにして塵光動
き、紫陌花は晴れて風色来る、日、豔は藤蔓を欺いて鶯
限り無く、香は荊花を壓して蝶飛ばす、紫、内史舊山
空しく日暮れ、南朝の古木人に向つて秋なり、將に嶺外
として留夢中の郷信秋鴈に驚き、總下の林聲夜蟬を帯ぶ、
居、獨り曉山に向て露の濕ふを知り、遠く秋水に臨んで
雲の明を愛す、王秀才を新河の柳色千株暗く、故國の雲帆
萬里に歸る、楊松陵の宋汴州、一院の綠錢童子拂ふ、千竿の
青玉主人栽り、宣供奉に露は丹地に凝つて初め雨かと疑
ひ、煙は紅樓に著いて半ば是れ霞、紅樓院宣供空門水は定
まつて埃塵遠く、眞偈金書世界に稀れなり、金字に題し、
上人を供養

劉禹錫

句

煙波半落新沙地、鳥雀羣飛欲雪天、初櫻桃各
 帶雨胭脂濕楊柳、當風綠線低、想妻令公亭山似
 屏風、江似簾、叩絃來往月明中、舟泛晴日碧空
 雲脚斷、一條如練挂山尖、泉、瀑布飛文鬪疾敲
 銅器、陪宴會歡吐錦茵、酬李校事

周元範

奉和白舍人遊鏡湖夜歸

風前酒醒看山笑、湖上詩成共客吟、
 畫燭滿堤燒月色、澄江繞樹浸城陰。

句

路出胥門深淺浪、月殘吳苑兩三星、和白舍人泛湖
 早發洞石橋路上千峰月、山殿雲中半夜鐘、早發洞石橋路上千峰月、山殿雲中半夜鐘。

寄白舍人兼詩林松隱二長老。

句

煙波半は落つ新沙地、鳥雀群り飛んで雪ならんと欲するの天、初櫻桃を帯びて胭脂濕ひ、楊柳風に當つて綠線低る、妻令公亭山は屏風に似て江は簾に似たり、絃を叩いて來往す月明の中、舟泛晴日碧空雲脚斷え、一條練の如く山尖に挂る、泉、瀑布飛文鬪疾銅器を敲く、宴に陪して會歡錦茵に吐く、李校事に酬ゆ。

周元範

白舍人の鏡湖に遊んで夜歸るに奉和す

風前酒は醒めて山を見て笑ひ、湖上詩成つて客と共に吟す、
 畫燭滿堤月色を燒き、澄江樹を繞つて城陰を浸す。

句

路は胥門を出づ深淺の浪、月は吳苑に殘す兩三星、和白舍人泛湖
 早發洞石橋路上千峰の月、山殿雲中半夜の鐘、早發洞石橋路上千峰の月、山殿雲中半夜の鐘。
 白舍人と鮑林相繼との二長老に寄す。

王魯復

水樓

山銜落日、溪光動、岸轉回風、檻影浮、座內數聲來、遠鶴、煙中一派、辨孤舟。

句

清泉逸屋澄心遠、曙月銜山出、定遲。贈僧惟勤。

陸暢

句

滿手香傳金菊酒、漏聲遙滴上陽宮。九日。

鮑溶

句

徑草漸生長短綠、庭花欲綻淺深紅。春日、春夜、夜瑟絃驚綠流水、暖松花放碧香煙。春日、聽聞、疑殘燭、軒下朝吟向暖風。春日、貧居、幽客攜琴好

全唐詩逸上

王魯復

水樓

山は落日を銜んで溪光動き、岸は回風を轉じて檻影浮ぶ、座内數聲遠鶴來り、煙中の一派孤舟を辨ず。

句

清泉屋を透つて澄心遠く、曙月山を銜んで定を出づる遲し。贈僧惟勤。

陸暢

句

滿手香は傳ふ金菊の酒、漏聲遙かに滴る上陽宮。九日。

鮑溶

句

徑草漸く生ず長短の綠、庭花綻びんと欲す淺深の紅。春日、夜瑟絃は驚く綠流の水、暖松花は放つ碧香の煙。春日、聽聞夜舉んで殘燭を澹し、軒下朝に吟じて暖風に向ふ。春日、幽客琴を攜へて好し歸り去る、七絃閑に和す百泉の聲。貧居、

歸去、七絲閑和百泉聲、送友人、歸山、野寺訪僧歸

帶月、芳林攜客醉眠花、贈東

張蕭遠

句

須臾滿寺泉聲合、百尺飛簷挂玉繩、興善寺、

座客醉來雲雨散、一行高鳥萬山秋、莫綺羅

香裏春長在、絲管聲中水暗流、西山滙口、

何事不歸巫峽去、故來人世斷人腸、歌、身居

曉幃紅霞外、書讀秋牕紫竹間、借山題、瀑布

水高清漢冷莓苔、橋滑碧煙虛、送道器上、日

月在、天長照耀、了無塵垢汗清光、道寬、

殷曉藩

句

雲收碧海連天水、風動紅蕉滴露光、送韓處、

律勝起

友人の山に歸る野寺僧を訪うて歸つて月を帯び、芳林客を携へて酔うて花に眠る、東郊に、贈に。

張蕭遠

句

須臾滿寺泉聲合し、百尺の飛簷玉繩を挂く、興善寺、座

客醉ひ來つて雲雨散じ、一行の高鳥萬山の秋、莫綺羅香

裏春長へに在り、絲管聲中水暗に流る、西山滙口、何

事ぞ巫峽に歸り去らず、故に人世に來つて人の腸を斷

つ、歌、身は居る曉幃紅霞の外、書は讀む秋牕紫竹の間、

山觀を借り、瀑布水は高うして清漢冷やかに莓苔橋は滑

かにして碧煙虛し、道器上人の、日月天に在り長へに

殷曉藩

句

雲は收つて碧海連天の水、風は動いて紅蕉滴露の光、韓處、

律勝

尊府
墓。

施肩吾

句

空巖雨暴泉聲亂、幽徑苔深鳥跡重。唐

章孝標

送張孝廉歸吳

吳將勤苦見高科、藝至春官不奈何。想得江南諸父老、因君鞭撻子孫多。

夜笛詞

皎潔西樓月未斜、笛聲寥亮入東家。頓令燈下裁衣婦、誤剪同心一片花。

題碧山寺塔

六時佛火明珠綴、午後茶煙出翠微。篆砌乳泉梳石髮、滴松銀露洗牆衣。

起容府墓
を送る。

施肩吾

句

空巖雨暴して泉聲亂れ、幽徑苔深うして鳥跡重る。唐

章孝標

張孝廉の吳に歸るを送る

吳將勤苦高科を見る、藝、春官に至つて奈何ともせず、想ひ得たり江南の諸父老、君の鞭撻に因つて子孫多し。

夜笛の詞

皎潔たる西樓月未だ斜めならず、笛聲寥亮東家に入る、頓に燈下裁衣の婦をして、誤つて同心一片の花を剪らしむ。

碧山寺の塔に題す

六時佛火明珠綴る、午後茶煙翠微を出つ、砌を築るの乳泉石髮を梳り、松に滴るの銀露牆衣を洗ふ。

翫月遇雲

無端玉葉連天起、不放金波到曉流、暗情蚌
胎沈海面、仰思鵬翼破風頭。

句

錢塘去國三千里、一道風光任意看、及第珠呈
夜浦螢無影、鶻坐秋林鳥失行、奉酬朱二十
四見寄詩、
昨日見君親下筆、五花牋上黑龍飛、觀草
書、何
人枉折教狼籍、孤負春風長養情、楊柳梅花
帶雪飛、琴上柳色和煙入、早春初晴
野宴、阮籍
嘯場人步月、子猷看處鳥棲煙、竹白練鳥迷
山芍藥、紅妝妓妬水林檎、漁州、
定州、今日華山秋
頂上、開天長叫在長空、獨鶴
語、天風更送新聲
出、不放行雲過鳳樓、梨園、
調、昨日天宮吹樂府、
六官絃管一時新、贈
少府、通傳勝事因風月、

月を翫んで雲に遇ふ

一六

端無く玉葉天に連つて起る、金波を放つて曉に到つて流
れ、めず、暗に惜む蚌胎海面に沈むを、仰いで思ふ鵬翼
風頭を破るを。

句

柳錢塘國を去る三千里、一道の風光意に任せて看る、及第、
第、
珠、夜浦に呈して螢、影無く鶻、秋林に坐して鳥行を失ふ、
朱二十四寄せらる。昨日見る君が親しく筆を下すを、五花牋
るの時に奉酬す。昨日見る君が親しく筆を下すを、五花牋
上黒龍飛ぶ、草書を
觀る、何人が枉げて折り狼籍たらしむ、孤
負す春風長く情を養ふを、楊柳梅花雪を帯びて琴上に飛
ぶ、柳色煙に和して酒中に入る、早春初晴
野宴、阮籍嘯ふく場人
月に歩し、子猷看る處鳥煙に棲む、竹白練鳥は迷う山芍
藥、紅妝妓は妬む水林檎、漁州に
定州、今日華山秋頂の上、天に
開ゆるの長叫は長空に在り、獨鶴
語、天風更に新聲を送り出
し、行雲を放つて鳳樓を過ぎしめず、梨園、
調、昨日天宮樂府を
吹き、六官絃管一時に新たなり、贈
少府、勝事を通傳す
るは風月に因り、愁腸を打破するは是れ酒杯、漁州、
定州、姑蘇
臺上煙花の月、寧ぞ負んや春風簫管の聲、贈
二十一及第、
少府、

打破愁腸是酒杯、遊、種姑蘇臺上煙花月、寧
 負春風簫管聲、遊、種二十玉輪低月中天曉、
 金鐸縱風上界秋、登、總持蕭灑竹房塵境外、
 滿天雲月共清虛、題、鍾初言若浚川流巨海、
 戒如秋月挂長空、贈、首、福金殿月中看擣藥、
 玉樓風裏聽吹笙、宿、天

陳標

句、

長把酒杯憑夜月、每將詩思泥春風、贈、祝
 陽樂事經過盡、峴首煙花倒瀉空、叙、猶
 底鮫人淚滴在衣裳、半、欲、霧、踏春明門外襄
 陽路、落日秋風送客歸、襄、陽、襄、陽、襄、陽

楊收

入洞庭望岳陽

全唐詩過上冊

玉輪低月中天的曉、金鐸縱風上界的秋、總持、寺、塔、登、種蕭灑たる
 竹房塵境の外、滿天の雲月共に清虛、鍾初、鍾師、院、題、言は浚川
 の巨海に流るよが若く、戒は秋月の長空に挂かるが如
 し、首、福、法、師、天、柱、鏡、に金殿月中藥を擣くを看、玉樓風裏笙を吹くを
 聽く、宿、天、柱、鏡、に

陳標

同

長く酒杯を把つて夜月に憑、毎に詩思を將て春風に泥
 す、祝、元、贈、に襄陽の樂事經過し盡き、峴首の煙花倒瀉して
 空し、踏、を猶疑ふ波底鮫人の淚、滴つて衣裳に在り半は
 零ちんと欲す、半、踏、霧、踏春明門外襄陽の路、落日秋風客の歸る
 を送る、襄、陽、襄、陽、襄、陽、襄、陽

楊收

洞庭に入つて岳陽を望む

一七

飛鷗撒浪三千里、暮草搖風一萬畦、黛色淺
澗山遠近、碧煙濃淡樹高低。

許渾

句

葦葭水暗螢知夜、楊柳風高鴈送秋。常州留
與楊給
露滴曉花疑錦繡、風吹寒竹認笙簧。四
歌

喻鳧

句

虹橫布水臺南雨、鴈返爐峰頂北霞。送歐陽
半
摩及
閑臥東風燈漸曉、溪南花氣雨中來。溪
居
夜雨一別山陰詩酒客、水風花片夢蘭亭。寄山
陰李
士處

祝元膺

句

飛鷗浪に撒す三千里、暮草風に搖く一萬畦、黛色淺澗山
遠近、碧煙濃淡樹高低。

許渾

句

葦葭水暗くして螢夜を知り、楊柳風高くして鴈秋を送
る。常州楊給事
に留與す、露は曉花に滴つて錦繡かと疑はれ、風は寒
竹を吹いて笙簧を認む。歌考に
題す。

喻鳧

句

虹は横ふ布水臺南の雨、鴈は返る爐峰頂北の霞。歌、歐陽半
摩
の及第し
て彭澤に歸
るを送る、閑臥東風燈漸く曉なり、溪南の花氣雨中来
る。溪居夜、一別山陰詩酒の客、水風花片蘭亭を夢む。山陰の
李處士
に寄す。

祝元膺

句

卻竟終南山色看、倚天橫展玉屏風、山雲、見二
 杜甫一生憐李白、應緣孔聖道才難、書懷、李二
 雲終南山脚盤龍勢、紫閣雲心望鶴歸、曲江

趙嘏

句

池上昔遊夫子風、雲間初起武侯龍、述懷、上二
 公亭分楚寺依依、樹水應公臺夜夜琴、送李二仲
 任、鸞鶴舞酣人自醉、琵琶聲緩客初來、與杜二仲
 同醉、高鳥過時秋色動、征帆落處暮煙生、
 齊安、夜吟孤枕潮聲近、曉過千山雪氣寒、
 晚秋、望臘早花緣路見、隨巖寒水隔林聞、
 歲、揚殿別業、宿處客塵隨、夜靜坐中煙水向人
 聖將揮策、開、
 嚴寺、

崔澹一作

全唐詩選上冊

卻つて終南山色を宛めて看る、天に倚り横に展ぶ玉屏風、山雲を看んで
 杜甫一生李白を憐む、應に孔聖の才難し
 と道ふに縁なるべし、書懷、放諸從、事に奉る
 紫閣雲心鶴の歸るを望む、曲江

趙嘏

句

池上昔遊夫子の風、雲間初めて起る武侯の龍、述懷、令上、孤相公に
 上、亭は分る楚寺依々の樹、水は應ず公臺夜々の琴、李二仲
 任、鸞鶴舞は酣に人自ら酔ひ、琵琶聲は緩かにして
 送る、客初めて來る、
 同醉、高鳥過ぐる時秋色動き、
 征帆落つる處暮煙生ず、齊安、
 夜吟孤枕潮聲近く、曉過千
 山雪氣寒し、江、
 望臘を望むの早花路に縁つて見え、巖に
 隨ふの寒水林を隔てよ聞く、揚殿別業、
 宿處の客塵
 夜に隨つて靜かに、坐中の煙水人に向つて開かなり、嚴
 寺に
 登る。

崔澹一作

句

九重城裏春來早、百尺樓頭日落遲。古意

賈島

句

莫是上天宮裏唱、歌聲飄下玉梁塵。雲

溫庭筠

句

沿澗水聲喧戶外、卷簾山色入牕來。山自有

晚風推楚浪、不勞春色染湘煙。次二洞、居、卓氏墟

前金線柳、隋家堤畔錦帆風。題池亭門外白雲

何處雨、一條清澗透溪流。失題

方干

句

巖溜噴空晴似雨、林蘿礙日夏多寒。題報恩寺上方

句

九重城裏春の來る早く、百尺樓頭日の落つる遅し。古意

賈島

句

是れ上天宮裏の唱なる莫からんや、歌聲飄へり下る玉梁の塵。雲

溫庭筠

句

澗に沿ふの水聲戶外に喧しく、簾を卷けば山色牕に入つて來る。山

自ら晚風の楚浪を推す有り、勞せず春色の湘煙を染むるを。洞庭の南、居、卓氏墟

前金線の柳、隋家堤畔錦帆の風。池亭に題す門外の白雲何れの處の雨ぞ、一條の清澗溪を透つて流る。失題

方干

句

巖溜空に噴いて晴雨に似たり、林蘿日を礙けて夏、寒多し。報恩寺の上方に題す。

羅隱

句

庾樓宴罷三更月、弘閣談時一座風。寄主客張員外。

羅虬

過友人故居

堤草鼻空垂露眼、渚蒲穿浪湊煙芽、暗樓談

罷山橫黛、夜局碁酣燭墜花。

句

雪中放馬朝尋跡、雲外聞鴻夜射聲。和扶風老人詩。

龍鱗柳弱垂朝露、塵尾松高揮夜風。五華宮。猿

隔亂雲啼暮嶺、鴈和微雨下寒湖、江夜渡酒

酣千頃月、畫樓碁罷一臆山。郊

杜荀鶴

句

全唐詩逸上冊

羅隱

句

庾樓宴は罷む三更の月、弘閣談する時一座の風。主客張員外に寄す。

羅虬

友人の故居を過ぐ

堤草空に鼻して露眼垂れ渚蒲浪を穿つて煙芽を湊む、暗樓談は罷んで山黛を横へ、夜局碁酣はにして燭花を墜す。

句

雪中馬を放つて朝に跡を尋ね、雲外鴻を聞く夜射の聲、扶風老人の詩に和す。龍鱗柳弱くして朝露垂れ、塵尾松は高く夜風に揮ふ、五華宮。猿は亂雲を隔てよ暮嶺に啼き、鴈は微雨に

和して寒湖に下る、江。夜渡酒は酣なり千頃の月、畫樓碁

は罷む一臆の山。郊。

杜荀鶴

句

二七

千嶺雪消溪影綠、幾家梅綻酒波清、杜、湖外

春至日、風拂亂燈、山磬曙、露沾仙杏、石壇春、

紫極宮上元齋
次早詣道場。

神穎僧

句

手邊雲起何時雨、筆下波生不待風、山水

千嶺雪は消えて溪影綠なり、幾家梅は綻んで酒波清し、
湖外の杜員外春至る。風は亂燈を拂ふて山磬曙く、露は仙杏
日徳はるに懸ゆ、紫極宮上元齋次詣
を沾す石壇の春、道流に呈す。

神穎僧

句

手邊雲は起る何れの時の雨ぞ、筆下波は生じて風を待た
ず、山水

全唐詩逸 上冊終

全唐詩逸 中冊

日本上毛河世寧纂輯

池 桐 孫 按

惠文太子

太子名範、睿宗第四子、好學、工書、愛儒士、無貴賤、爲禮、禮與閹朝隱、劉廷琦、張諤、鄭絳等、善常飲酒、賦詩相娛樂、初王鄭改封衛、俄降封巴陵、從誅太平公主、以功賜封岐、薨、冊書贈太子及諡。

句 見千載佳句。

渭水橋邊春已渡、灞陵原上雨初晴、同季士懷長安
清冷池裏冰初合、紅粉樓中月未圓、寔大可哥宅可

全唐詩逸中冊

惠文太子

太子名は範、睿宗の第四子、學を好んで、書に工みなり、儒士を愛して、貴賤と無く、爲めに禮を盡くす、閹朝隱、劉廷琦、張諤、鄭絳等と善し、常に酒を飲み、詩を賦して相娛樂す、初め王鄭、封を衛に改め、俄かに降して、巴陵に封す、太平公主を誅するに從ひ、功を以て封を岐に賜ふ、薨するや冊書もて太子及び諡を贈らる。

句 千載佳句に見ゆ。

渭水橋邊春已に渡る、灞陵原上雨初めて晴る、季士と同く懷長安を懷
ふ、清冷地裏氷初めて合し、紅粉樓中月まだ圓かならず、

惜韶年三日暮、風光由繞碧燕觴、三日晚日

半銜西苑樹、晴雲直卷上天風、洛河山亭初晴離筵

風日三晡晚、歸路雲霞一道開。送程功還京

元兢

元兢、龍朔中官周王府參軍、著古今詩人秀

句二卷、及詩格一卷、詩一首。

蓬州野望 秘府論、元兢詩格引。

飄飄宕渠城、曠望蜀門隈、水共三巴遠、山隨

八陣開、橋形疑漢接、石勢似烟廻、欲下他鄉

淚、猿聲幾處催。

馬總

馬總、字會元、扶風人、少孤貧、好學、性剛直、不

妄交遊、貞元中、姚南仲鎮活臺、辟爲從事、坐

事貶、泉州別駕、元和中、遷、檢校刑部尙書、詩

大母宅に
宴す。惜む可し韶年三日の暮、風光由ほ繞る碧燕の觴、
三日、晚日半銜む西苑の樹晴雲直に卷く上天の風、洛河山亭の初
晴、離筵風日三晡の晚、歸路雲霞一道開く。程功の京に還るを送る。

元兢

元兢、龍朔中に、周王府の參軍に官す、古今詩人秀句二卷

及び詩格一卷を著す、詩一首。

蓬州野望 秘府論、元兢の詩格を引く。

飄飄宕渠の城、曠望蜀門の隈、水は三巴と共に遠く、山は

八陣に隨つて開く、橋形漢に接するかと疑ひ、石勢烟の

廻るに似たり、他郷の涙を下さんと欲せば、猿聲幾く處にか催す。

馬總

馬總、字は會元、扶風の人なり、少にして孤貧、學を好む、性

剛直、妄りに交遊せず、貞元中、姚南仲活臺に鎮す、辟して

從事と爲す、事に坐して泉州別駕に貶せらる、元和中、檢校刑部尙書に遷る、詩一首。

一首

贈日本僧空海離合詩釋空海性靈集序云和尚

昔在唐日作離合詩贈土僧惟上泉州別駕馬總一時大才也覺則驚怪因贈

詩云

何乃萬里來可非銜其才增學助玄機土人如子稀

胡伯崇號昆陵子

贈釋空海歌又見性靈集序中

說四句演毘尼凡夫聽者盡歸依天假吾師多技術就中草聖最狂逸

高鶴林官都虞候冠軍大將軍試太常卿上柱國

因使日本願謁鑒真和尚既滅度不

觀尊顏嗟而述懷見鑒真和尚傳按鑒真示寂在天平

實字六年鶴林奉使未詳在何年

全唐詩逸中册

日本僧空海に贈る離合詩釋空海の性靈集の序に云ふ和尚唐に在る

日離合詩を作り土僧惟上に贈る泉州別駕馬總是一時の大才なり覺て則ち驚怪し因つて詩を贈る云ふ

何ぞ乃ち萬里より來れる其才を銜ふには非ざる可し學を増して玄機を助けよ土人すら子の如きは稀なり

胡伯崇昆陵子

釋空海に贈る歌又性靈集の序の中に見ゆ

四句を説き毘尼を演ず凡夫聽く者盡く歸依す天吾が師に假して技術多し中に就いて草聖最も狂逸

高鶴林都虞候・冠軍大將軍に官し太常卿・上柱國に試みらる

日本に使用するに因つて鑒真和尚に謁せんことを願ふ既に滅度し尊顔を親す嗟いて懷心を述ぶ鑒真和尚の傳に見ゆ按するに鑒真の示寂は天平實字六年に在り鶴林の奉使するに未だ何れの年に在るか

を詳かにせざるなり

上方傳佛燈、名僧號鑿真、懷藏通鄰國、真如轉付民、早嫌居五濁、寂滅離鷲塵、禪院從今古、青松遶塔新、斯法留千載、名記萬年春。

朱千乘 延曆中、空海歸自唐、表上所著書、中有朱千乘詩集一卷。

句 見千載佳句。

錦纜扁舟花岸靜、玉壺春酒管絃清。 新移別業。

清觀 台州國清寺僧。

句 見智證大師傳、大師乃釋圓珍也。

數山新月冷、台嶠古風清。 和尙。

陳闍 以下二人、竝見秘府論、蓋唐中葉人。

罷官後卻歸舊居

不歸江畔久、舊業已凋殘、露草蟲絲濕、湖泥鳥跡乾、買山開客舍、選竹作漁竿、何必勞州縣、驅馳効一官。

上方佛燈を傳ふ、名僧鑿真と號す、懷藏鄰國に通ず、真如轉じて民に付す、早に嫌ふ五濁に居るを、寂滅鷲塵を離る禪院今より古く、青松塔を遶つて新たなり、斯の法千載に留め、名は記す萬年の春。

朱千乘 延曆中、空海唐より歸る、表して著らす所の書録を上る、中に朱千乘詩集一卷有り。

句 千載佳句に見ゆ。

錦纜扁舟花岸靜かに、玉壺春酒管絃清し。 新に館中の別業に移る。

清觀 台州國清寺の僧。

句 智證大師の傳に見ゆ、大師は乃ち釋圓珍なり。

數山新月冷やかに、台嶠古風清し。 圓珍和尙に屬る。

陳闍 以下二人、竝びに秘府論に見ゆ、蓋し唐の中葉の人。

官を罷めて後卻つて舊居に歸る

江畔に歸らざること久し、舊業已に凋殘す、露草蟲絲濕ひ、湖泥鳥跡乾く、山を買ふて客舍を開き、竹を選んで漁竿と作す、何ぞ必らずしも州縣に勞して、驅馳一官に效せん。

李堪

句

此心復何已、新月清江長、題、失雲歸石壁盡、月

照霜林清。失題。

崔致遠

崔致遠、高麗人、賓貢及第、高駢淮南從事、藝文志有、崔致遠、四六一卷、桂林筆耕二十卷。

兖州留獻李員外見千載佳句

芙蓉零落秋池雨、楊柳蕭疎曉岸風、神思只勞書卷上、年光任過酒杯中。

句

畫角聲中朝暮浪、青山影裏古今人、登慈和山、東人

詩話云、崔文昌侯致遠入唐登第、以文章著名、題潤州慈和寺、有畫角云云之句、後雞林買客入唐購時、有以此句書示者。煙低紫陌千行柳、日暮朱樓一

李堪

句

此心復何已、已まん、新月清江長し、失題、雲は石壁に歸つて盡き、月は霜林を照らして清し。失題。

崔致遠

崔致遠は高麗の人なり、賓貢及第、高駢淮南從事たり、藝文志に崔致遠四六一卷、桂林筆耕二十卷有り。

兖州にて李員外に留獻す、千載佳句に見ゆ。

芙蓉零落す秋池の雨、楊柳蕭疎たり曉岸の風、神思只勞す書卷の上、年光過ぐるに任す酒杯の中。

句

畫角聲中朝暮の浪、青山影裏古今の人、慈和山に登る、東人侯致遠唐に入つて登第し、文章を以て名を著す、潤州の慈和寺に題す、畫角云々の句有り、後雞林の買客唐に入つて詩を購ふ、此句を以て書示する者有り。煙は低し紫陌千行の柳、日は暮る朱樓一

曲歌、長安、洛水波聲新草樹、嵩山雲影舊樓臺、留洛中友人、雲布長天龍勢逸、風高秋月雁行齊、送舍弟、風遞鶯聲喧座上、日移花影倒林中、春、芳園醉散花盈袖、幽逕吟歸月在帷、成仁後、通士田、極目遠山烟外暮、傷心歸棹日邊遲、江上春懷。

金立之

金立之、新羅人、憲德王七年、從金昕入唐。

句 見千載佳句一

煙破樹頭驚宿鳥、露凝苔上暗流螢、秋夜望月、山人見月寧思寢、更掬寒泉滿手霜、峽山寺紺殿雨晴、松色冷禪林、風起竹聲餘、龍寺僧、風過古殿香煙散、月到前林竹露清、宿豐德寺、更有閑宵清淨境、曲江澄月對心虛、贈僧、寒露已催

曲の歌、長安、洛水の波聲新草樹、嵩山の雲影舊樓臺、洛中友人に留、雲は長天に布いて龍勢逸し、風は高く秋月雁行齊し、金弟嚴府、風は鶯聲を遞つて座上に喧しく、日は花影を移して林中に倒す、春、芳園酔ひ散じて花袖に盈つ、幽逕吟じ歸れば月帷に在り、名を成して後通士田、極目遠山烟外に暮れ、傷心歸棹すれば日邊遲し、江上春懷。

金立之

金立之は新羅の人なり、憲德王の七年、金昕に従つて唐に入れり。

句 千載佳句に見ゆ。

煙は破れて樹頭宿鳥驚き、露は凝つて苔上流螢暗し、秋夜望月、山人月を見て何ぞ寝ぬるを思はん、更に寒泉を掬す、峽山寺月、満手の霜を掬ぶ、紺殿雨は晴れて松色冷かなり、禪林風は起つて竹聲餘る、龍寺の僧、風は古殿を過ぎて香煙散じ、月は前林に到つて竹露清し、豐德寺に宿す、更に閑宵清淨の境有り、曲江の澄月に對して虚なり、僧に贈る、寒露已に

鴻北去、火雲漸散月西流、夕、園梅拆、甲迎春
笑、庭草抽、心持節芳、春。

金可紀 一作紀、按、韋孝標有送金可紀歸新羅詩、恐其人。

句、見千載佳句。

波衝亂石長如雨、風激疎松鎮似秋。題遊仙寺。

莊翺 以下六十八人、並見千載佳句、履歷俱無考。

尋幽居不遇

滿庭花落迷行路、遠院泉聲寫半山、向暮此

中回、首去、洞門深處鳥關關。

句

天外夜深風漸遠、高松長似水流聲、宿松門、焚
香暮入翻花殿、淨手秋開貝葉經、贈意上人、野
性本憐松下月、幽情唯愛洞中春、欲歸、殷懃
笑喻人間事、遙指庭花對夕陽、和尙、

催りして鴻、北に去り、火雲漸く散じて月、西に流る、秋、
園梅甲を拆して春を迎へて笑ひ、庭草心を抽いて節を待
つて芳、春。

金可紀 一に紀に作る、按ずるに韋孝標、金可紀新羅に歸るを送るの詩有り、恐らくは其人ならん。

句、千載佳句、見ゆ。

波は亂石を衝いて長く雨の如く、風は疎松に激して鎮秋に似たり。題遊仙寺。

莊翺 以下六十八人、並びに千載佳句に見ゆ、履歷俱に考ふる無し。

幽居を尋ねて遇はず

滿庭花落ちて行路に迷ひ、院を遊るの泉聲半山を寫す、
暮に向つて此の中首を回らして去る、洞門深き處鳥關
々。

句

天外夜深く風漸く遠し、高松長に似たり水流の聲、宿松門に
焚香暮に入る翻花殿、淨手秋開く貝葉經、意上人、野性本
憐む松下の月、幽情唯愛す洞中の春、山に歸らん、殷懃笑つ
て喻す人間の事、遙かに指す庭花の夕陽に對するを、和尙、

陸暈

春日

鶯歸樹頂繁聲轉、雁去天邊細影斜、雨拂青
青行處草、煙含灼灼望中花。

句

三尺寒光冰在手、一張弓勢月當心。唐李巖
巖下光陰戶牖に生じ、湖邊の形勢池臺に入る、松孤帆影
入江煙盡、百舌聲流浦樹新。送八弟。

何玄

看花

莫怪出門先驛馬、暮年常怨看花遲、可憐盡
日春山下、似雪如雲一萬枝。

句

一望白雲千萬斷、箏聲日暮出花林、箏を門外

陸暈

春日

鶯は樹頂に歸つて繁聲轉ず、雁は天邊に去つて細影斜なり、雨は拂ふ青々行處の草、煙は含む灼々望中の花。

句

三尺の寒光冰手に在り、一張の弓勢月、心に當る。李都使、
巖下の光陰戸牖に生じ、湖邊の形勢池臺に入る、松、孤帆
影は江煙に入つて盡き、百舌聲は浦樹に流れて新たな
り。胡八弟を送る。

何玄

花を看る

怪む莫れ門を出でて先づ馬を驛すを、暮年常に怨む花を
看るの遲きを憐れむ可し盡日春山の下、雪に似たり雲
の如し一萬枝。

句

一望白雲千萬斷え、箏聲日暮花林を出づ、箏を門外の夕

夕陽寒映竹洞中秋水暗連山山居鐘聲半
 夜香山雨散入前林楓葉秋宿多寶寺寺臨飛鳥
 青山遠徑轉幽蘿白日長想白鶴寺黃昏人到鐘
 聲裏雲起龍池不見山遊三覺寺客來惆悵僧
 禪後月出松門滿地霜仰房禪師朔風寒日筋
 聲急萬里遼城一段雲詠軍前滿山月色連
 溪下林葉蕭蕭一夜霜山居秦客訪花驚出
 洞庚公看月誤登樓

斐公衍

春夜宿雲際寺

境靜聞鐘聲易響庭高見月影難沈青山解
 隔塵中事流水能清物外心

句

碧澗水流高殿影青蘿風散晚鐘聲遊碧澗寺數

陽寒竹に映じ、洞中の秋水暗に山に連る、山居鐘聲半
 夜香山の雨、散じて入る前林楓葉の秋、宿多寶寺寺は飛鳥
 に臨んで青山遠く、徑は轉じて幽蘿白日長し、白鶴寺に黃
 昏人は到る鐘聲の裏、雲起つて龍池山を見ず、三覺寺上方
 昏人は到る鐘聲の裏、雲起つて龍池山を見ず、三覺寺上方
 客來つて惆悵す、僧禪の後、月出でて松門滿地の霜、仰房
 客來つて惆悵す、僧禪の後、月出でて松門滿地の霜、仰房
 朔風寒日筋聲急なり、萬里遼城一段の雲、詠軍前滿
 山の月色溪下に連り、林葉蕭々たり一夜の霜、山居秦客
 花を訪ふて驚いて洞を出で、庚公月を見て誤つて樓に登
 る。斐公

斐公衍

春夜雲際寺に宿す

境靜かにして鐘聲の響き易きを聞き、庭高うして月影の
 沈み難きを見る、青山隔つるを解す塵中の事、流水能く
 清くす物外の心。

句

碧澗水に流る高殿の影青蘿風、散す晚鐘の聲、遊碧澗寺に

片殘雲歸洞口、孤輪晴月挂山頭。題成中丞客廬。

蘇替

聽琴

絃中恨起湘山遠、指下情多楚峽流、危檻曲終雲影曙、高樓風定燭光秋。

路半千

賞春

暖日當頭催展菜、和風次第遣開花、呼童遠取溪心水、待客來煎柳眼茶。

句

蒼翠暗消三暑熱、孤高能鎖四時煙、綠楊近浦堪垂釣、翠竹當軒好韻琴。題別業。百舌乍啼鶯學語、分明聽在指頭邊。題。

賀蘭暹一作

數片的殘雲洞口に歸る、孤輪晴月山頭に挂る。成中丞客廬に題す。

蘇替

琴を聽く

絃中恨みは起つて湘山遠し、指下情は多し楚峽の流れ、危檻曲終つて雲影曙け、高樓風は定まる燭光の秋。

路半千

春を賞す

暖日當頭展菜を催ふす、和風次第に花を開かしむ、童を呼んで遠く取る溪心の水客を待つて來り煎す柳眼の茶。

句

蒼翠暗に消す三暑の熱、孤高能く鎖す四時の煙、綠楊近浦釣を垂るとに堪へたり、翠竹軒に當つて好韻琴、別業に題す。百舌乍も啼いて鶯、詩を學ぶ、分明に聽いて指頭の邊に在り、筆を彈す。

賀蘭暹一に暹に作る。

句

玉貌自宜雙黛翠、桃花獨笑一枝春、贈所見妓女
 秋水未鳴遊女佩、寒雲空滿望夫山、寄所見佳人
 黃閣暮蟲羅戶牖、紫庭春草遍階墀、觀北城宮殿
 綠耳半蔓湘浦竹、驪文亂點武陵花、馬文
 客路千峰引、薊北鄉心片月知、宿羽前仰懷
 雲渺渺川程遠、木葉蕭蕭雁過初、客
 傳鄉信去、秋風偏向客衣寒、贈永千峰
 因晴出、百谷泉聲欲暮寒、望大黛山
 海上、泉聲遙落白雲中、百丈山
 意、慙非詞客馬相如、贈永秋
 日暎深山水氣寒、喜到

傳溫

句

全唐詩逸中册

句

玉貌自宜し雙黛翠なり、桃花獨り笑ふ一枝の春、風所の
 秋水未だ鳴らず遊女の佩、寒雲空しく滿つ望夫山、所見
 黃閣暮蟲羅戸牖に羅なり、紫庭春草階墀に遍ねし、寄
 北宮殿を觀る、綠耳半蔓す湘浦の竹、驪文亂點す武陵の花、馬文
 遼陽客路千峰引き、薊北郷心片月知る、宿羽前仰
 山雲渺々川程遠く、木葉蕭々雁過るの初め、客
 予して去り、秋風偏に客衣に向つて寒し、贈永千峰
 黛色晴に因つて出で、百谷の泉聲暮れなんと欲して寒し、大黛山
 黛色廻かに臨む滄海の上、泉聲遙かに落つ白雲の中、百丈
 如に非ざるを、贈永秋
 深山に暎じて水氣寒し、喜到

傳溫

句

三三

霜墜中天衣覺冷、月臨虛牖紙偏明、冬夜宿
 春風暗剪庭前樹、夜雨偷穿石上苔、山居、曲水
 兩行排鴈齒、斜橋一道踏龍鱗、溪橋、山深野客
 如禪客、夜久松聲似雨聲、對僧、院花疑漢女啼
 粧淚、水似吳娃笑弄筇、初山居、遇雨。

曹翫

句

花映畫天鶯、戶日樹搖晴暮上階煙、供詞、東亭、
 驚飛沙鳥紛紛雪、候信雲帆片片風、過湖、風
 唱一拋琴瑟韻、霓裳長謝綺羅春、贈、秋澄、
 上水無藏影、春泛遊雲不繫心、贈、老松不
 見千年鶴、殘雪猶疑六月花、行、山

陳素風

句

霜は中天より墜ちて衣、冷を覺ゆ、月は虚牖に臨んで紙
 偏に明かなり、冬夜宿春風暗に剪る庭前の樹、夜雨偷に
 穿つ石上の苔、山居、曲水兩行雁齒を排し、斜橋一道龍鱗を
 踏む、溪橋、山深野客如禪客の如く、夜は久しくして
 松聲雨聲に似たり、對僧、院花は疑ふ漢女粧に啼くの涙か
 と、水は似たり吳娃笑つて筇を弄するに、山居を助うて、
 雨に遇ふ。

曹翫

句

花は畫天に映す戸に當るの日、樹は晴暮に搖く階に上
 るの煙、供詞、東亭、驚いて飛ぶ沙鳥紛紛の雪、信を候す雲帆
 片々の風、過湖、風鳳唱一たび拋つ琴瑟の韻、霓裳長く謝
 す綺羅の春、贈、秋澄、上水に澄んで影を藏する無く、
 春は遊雲に泛んで心に繫からず、贈、老松不見千年の
 鶴、殘雪猶ほ疑ふ六月の花かと、行、山

陳素風

句

盧條

句

三徑雨來煙草合、一丘琴後濁醪傾、即事、共
話世情塵藹藹、每嗟人事水潺湲。送友。

崔行檢

句

紫箒粉成塵漸密、白雲岑起未全高、雲夢亭
慙愧交親問生事、一溪雲鳥滿牀霄。即事。

陳上卿

句

門前蕭索青松老、雲裏逍遙白鶴閑、身、
瀾晴泛三春色、桃李爭開兩岸芳。和事、國呂

開三石

王幹

盧條

句

三徑雨は來つて煙草合し、一丘琴後濁醪傾く、即事、共
話す世情塵藹々、毎に嗟く人事水潺湲。送友。

崔行檢

句

紫箒粉成つて塵に漸く密なるべし、白雲岑起りて未だ全
く高からず、雲夢亭に涼慙愧す交親の生事を問ふを、一溪
の雲鳥滿牀の書事。即事。

陳上卿

句

門前蕭索として青松老い、雲裏に逍遙して白鶴閑かな
り、實山に波瀾晴は泛ぶ三春の色、桃李争子て開く兩岸の
芳、和事、國呂石梁を聞くに和す。護少府新たに

王幹

句

莫驚此地逢春早、祇爲長安近日邊。長安春日。

樊寔

句

仍憐一夜春風急、開盡瑤池萬樹花。步虛詞。

張殷衡

句

已被天桃歡來醉、麴塵絲樹恨何人。清明日。

殷穆

句

藤拂石谿流水淨、風來雲寺過鐘微。題鄭士林亭。

解叔祿

句

千花苑外韶芳暖、一鳥山邊翠色寒。長安望。

句

驚く莫れ此地春に逢ふの早きを、祇だ長安日邊に近きが爲なり。長安春日。

樊寔

句

一夜春風の急なるを憐れむに仍つて、開き盡くす瑤池萬樹の花。步虛詞。

張殷衡

句

已に天桃に歡び來つて醉はる。麴塵絲樹何人をか恨む。清明日。

殷穆

句

藤は石谿を拂ふて流水淨く、風は雲寺に來つて過鐘微かなり。鄭士の林亭に題す。

解叔祿

句

千花苑外韶芳暖かに、一鳥山邊翠色寒し。長安望。

石殿

句

炎氣擁爲衣上火、汗光流出腹中湯熱。

張野人

句

銅街陌柳條條翠、金谷園花片片燃上巳宮三落中。

衛墳

句

明月開時山夜白、暖泉流處草冬青水亭に題す。

虞構

句

寒光乍退風猶切、春色新行柳未知元日。

崔幢

句

石殿

句

炎氣擁爲す衣上の火、汗光流出す腹中の湯熱。

張野人

句

銅街陌柳條々翠なり、金石園花片々燃ゆ上巳宮中に落す。

衛墳

句

明月開く時山夜白く、暖泉流ると處草冬青し水亭に題す。

虞構

句

寒光乍ち退いて風猶を切、春色新に行はれて柳未だ知らず元日。

崔幢

句

寒氣乍凝空有露、秋風不動水無波。八月十五夜。

李淮一作

句

撩亂客心眠不得、秋庭一夜月中行。此句見

金雲卿

句

秋月夜閉闌、柔曲金風吹落玉簫聲。秦樓

楊郁伯

句

簾前對酒閑無事、待得分明似鏡時。待

李伯良

句

風向銀燈花燼落、月臨珠箔玉鈎垂。謝女

林逋

全唐詩選中書

寒氣乍凝空有露、秋風不動水無波。八月十五夜。

李淮一作

句

客心撩亂眠不得、秋庭一夜月中行。此句見

金雲卿

句

秋月夜閉闌、柔曲金風吹落玉簫聲。秦樓

楊郁伯

句

簾前對酒閑無事、待得分明似鏡時。待

李伯良

句

風向銀燈花燼落、月臨珠箔玉鈎垂。謝女

林逋

句

白玉飛泉千似雪、青松蔽日一林風。蘇大夫新開泉。

長孫鑑

句

霜霽雲夢千巖雪、鴈度吳江萬木秋。浙江邊楚老。

戴逵

句

蛾透燈輪千簇動、鶴飛雲路一聲長。宿報恩寺。

豆盧岑一作樂

句

隔門借問人誰在、一樹桃花笑不應。尋人遇。

沈寧

句

黃紙遠承新詔命、青袍遙謝舊山峯。書上洛陽劉明

句

白玉飛泉千似雪、青松日蔽一林風。蘇大夫新開泉。

長孫鑑

句

霜は霽ふ雲夢千巖の雪、雁は度る吳江萬木の秋。浙江に楚老に逢ふ。

戴逵

句

蛾は燈輪を透つて千簇動き、鶴は雲路に飛んで一聲長し。報恩寺に宿す。

豆盧岑一作樂

句

門を隔て、借問す人誰れか、在る、一樹の桃花笑つて應へず。人を尋ねて遇はず。

沈寧

句

黃紙遠く承く新詔命、青袍遙かに謝す萬山峯。洛陽の劉明府に書上す。

李許

句

澹蕩和風催去袖、搖揚淑景照離樽。送合弟

顧効古

句

孤舟發處沙鷗起、明月落時江水寒。送王逸人歸海

上

盧邕

句

杯浮綠酒邀君醉、筆落紅牋寫我心。送江山人

遊南

李潭

句

李許

句

澹蕩たる和風去袖を催し、搖揚たる淑景筆樽を照らす。合弟を送る。

顧効古

句

孤舟發する處河鷗起り、明月落つる時江水寒し。王逸人の海に歸るを送る。

盧邕

句

杯、綠酒を浮べて君を邀へて酔はしめ、筆、紅牋に落ちて我が心を寫す。江山人の南遊を送る。

李潭

句

人過遠村秋日晚、鳥飛平野暮天空。秋暮。

鄭明

句

山頭落日催歸馬、河畔垂楊纜醉船。寒食陪諸公宴中

中披

王有初

句

頻醉管絃三月暮、遠尋花柳五湖來。唐在賀先覺

周存孺

句

指下黃金星未曙、七條絃上夜烏啼。唐

張牙

句

看看舞罷輕雲去、應赴襄王夢裏期。拓枝歌。

人過ぎて遠村秋日晚れ、鳥飛んで平野暮天空し。秋暮。

鄭明

句

山頭の落日歸馬を催し、河畔の垂楊醉船を纜く。寒食諸公宴中、披す。

王有初

句

頻りに管絃に酔ふ三月の暮、遠く花柳を尋ねて五湖に來る。在賀先覺に贈る。

周存孺

句

指下黄金星未だ曙けず、七條絃上夜烏啼く。唐。

張牙

句

看看舞ひ罷んで輕雲去る、應に襄王夢裏の期に赴くなるべし。拓枝歌。

鄭師冉

句

煙消門外青山近、露重聽前綠竹低。題源孝康別業。

章麟

句

聞說靜中偏愛竹、自看疎密種秋煙。題宋山人。

崔建

句

回風向曉平湖上、引得荷花隔浦香。夏日。

朴昂

句

明主十徵何謝病、煙霞不許作堯臣。本乙山人、路

次三
除寺。

鄧展

鄭師冉

句

煙消えて門外青山近く、露重うして聽前綠竹低る。源孝康の別業に題す。

章麟

句

聞くならく靜中偏に竹を愛すと、自ら疎密を看て秋煙を種う。宋山人に題る。

崔建

句

回風曉に向ふ平湖の上、荷花を引き得て浦を隔てし香し。夏日。

朴昂

句

明主十徵何ぞ病を謝せん、煙霞許さず堯臣と作るを。本乙山人、路を尋ねて除、雲際寺に次る。

鄧展

句

秋水漲來舟去速、夜雲收盡月行遲。泝水東歸時。

韋振

句

林外雪消山色靜、聽前春淺竹聲寒。奉酬見贈。

漢皓

句

西風暮雨驚殘夢、應是巫山寄恨來。對雨。

道彥

句

風起竹間螢影亂、月明江上笛聲多。秋夜夜旅泊。

靜檻前調綠綺、日高牕下戴烏紗。貧居自遣。

遠飄滄海上、草堂深鎖白雲間。途中。

掩潮光裏野徑斜、分草色中。湖上雨居。

句

秋水漲り來つて舟の去ること速に、夜雲收まり盡くして月の行くこと遅し。泝水東歸の時。

韋振

句

林外雪は消えて山色靜かに、聽前春淺うして竹聲寒し。贈らるるに奉酬す。

漢皓

句

西風暮雨殘夢を驚かす、應に是れ巫山恨を寄せ來るなるべし。雨に對す。

道彥

句

風起つて竹間螢影亂れ、月明かに江上笛聲多し。秋夜夜旅泊。
靜かに檻前綠綺を調し、日高く牕下烏紗を戴く。貧居自遣。
漁艇遠く飄る滄海の上、草堂深く鎖す白雲の間。途中。
柴門半は掩ふ潮光の裏野徑斜めに分る草色の中。湖上雨居。

冀金

句

千里放心隨野鶴、五湖乘興狎沙鷗。浪

子泰

句

風姿豔態應無比、爛熳當春一樹芳。醉後寄上官

紹伯

句

遠聲歷歷風和水、近色青青竹映松。題昌館

郁回

句

破暗衣珠明有焰、照聽心月淨無塵。題上院

季方

句

冀金

句

千里放心野鶴に隨ひ、五湖興に乗じて沙鷗に狎る。浪

子泰

句

風姿豔態應に比無かるべし、爛熳春に當る一樹の芳。醉後寄上官

紹伯

句

遠聲歷々風、水に和す、近色青青竹、松に映す。題昌館に

郁回

句

暗を破るの衣珠明かにして焰有り、聽を照らすの心月淨うして塵無し。題上の院

季方

句

林間縦有殘花在、留到明朝不是春。三月

李侍御以下失名

句

盡日不歸花路晚、綠楊樓下醉如泥。楊柳、月

上西陵千里濶、漁舟夜火隔沙明。浪淘

陸侍御

句

今年閏在春三月、剩見金陵一月花。淮南、李中丞

盧秀才

句

長醉金陵前殿酒、偏聞玉樹後庭花。殷淑

真玄以下

句

精明合浦珠相似、斷割昆吾劍不如。上、李、向、重

林間縦ひ殘花の在る有るも、留まつて明朝に到らば是れ春ならず。三月

李侍御以下失名

句

盡日歸らず花路の晚れ、綠楊樓下酔ふて泥の如し、楊柳、月は西陵に上つて千里濶し、漁舟の夜火河を隔て、

明かなり。浪淘

陸侍御

句

今年の閏は春三月に在り、剩し見る金陵一月の花。淮南の李中丞

盧秀才

句

長く酔ふ金陵前殿の酒、偏に聞く玉樹後庭の花。殷淑

真玄以下

句

精明は合浦の珠に相似たり、斷割は昆吾の劍も如かず。李、向、重

眞幹 眞一作直。

句

鷹隼風高隨草去、旌旗日晚傍山來。釋幸驪詩宮。

久則

句

湖上青山今欲買、白雲無主問何人。旅中。

去奢

句

騎驪春風離漢苑、心懸秋月照吳關。總征詞。

良人

句

千點暮山三楚盡、一泓寒水九江斜。題江州寶曆寺。

圖

宋休

全唐詩逸中冊

眞幹 眞一作直。
に作る。

句

鷹隼風高く草に随つて去り、旌旗日晚れて山に傍ふて來るに幸す。

久則

句

湖上青山今買はんと欲す、白雲主無し何人に問はん。越中に旅寓す。

去奢

句

騎春風に驪して漢苑を離る、心に秋月を懸けて吳關を照らす。總征詞。

良人

句

千點の暮山三楚盡き、一泓の寒水九江斜めなり。江州寶曆寺の圖に題す。

宋休

句

借問夜來丹竈畔、幾多風水落絲桐。香江山人。

清閑

句

五色雲中鳴玉磬、千花臺上禮金仙。懸浮寺。

靈業

句

洞中仙草嚴冬綠、江外靈山臘月青。遊靈方寺。

大閑

句

霜霜草迥寒風急、鴈度秋林落葉頻。代雷孝廉、送經州李判官。

州李判官

奉蚌

句

句

借問昨夜來丹竈の畔、幾多の風水絲桐に落つ。江山人。

清閑

句

五色の雲中玉磬を鳴らし、千花の臺上金仙に禮す。浮懸寺。

靈業

句

洞中の仙草嚴冬に綠りなり、江外の靈山臘月に青し。靈方寺の上方に遊ぶ。

大閑

句

霜は草迥を霜して寒風急なり、鴈は秋林に度つて落葉頻りなり。雷孝廉に代つて、經州李判官を送る。

奉蚌

句

6

綠蘿剪作三春柳、紅錦裁成二月花。
思遠

綠蘿剪り作す三春の柳、紅錦裁し成す二月の花。
思遠

全唐詩逸
中册終

日本詩話叢書

五〇

全唐詩逸下冊

無名氏

海陽泉

以下十三首、之を藤原佐理の眞談中にて得たり、佐理、天曆、安和の朝に任じ、時與五代

五代宋初相接、且其聲調を味ふに流暢通快、必ず是れ唐の中葉人の作る所。

人誰無耽愛、各亦有所偏於吾喜尙中、不厭
千萬泉、誠知滄水曲、遠在南海隅、自從得海
陽、便欲終老焉、怪石狀五岳、旋廻枕深淵、激
繁似湧雲、靜同冰鏡懸、吾欲以海陽、跨於河
洛間、使彼雲林客、來遊皆忘還。

曲石角 第五第八句、俱缺三字。

全唐詩逸下冊

日本上毛河世寧纂輯

下田 衡 校

無名氏

海陽泉

以下十三首、之を藤原佐理の眞談中にて得たり、佐理、天曆、安和の朝に任じ、時與五代

宋初と相接す、且其聲調を味ふに流暢通快、必ず是れ唐の中葉人の作る所。

人誰れか耽愛無からん、各亦偏する所有り、吾が喜尙の
中に於て、厭はず千萬泉、誠を知る滄水の曲、遠く南海の
隅に在り、海陽を得てより、便ち終老せんと欲す、怪石五
岳を狀し、旋廻深淵に枕む、激繁湧雲に似たり、靜同冰鏡
懸る、吾、海陽を以て、河洛の間に跨り、彼の雲林の客をし
て、來遊して皆還るを忘れしめんと欲す。

曲石角 第五第八句、俱缺一字を缺く。

五一

爲愛水石奇、不厭湖畔行、每登曲石島、則有
遠興生、戲差半湖□、宛若龍象形、又如瑯琊
臺、□盤枕滄溟、醉人入島來、將醉強爲醒、扣船
復搖棹、學歌漁父聲、呼我上酒船、更深江海情、

望遠亭 第五第十二句、俱缺二字。

泛湖勞水戲、飲漱厭清澗、來登望遠亭、心目
又不閑、孤峯入座□、高嶺橫前軒、更復歡長
風、蕭寥聽戶間、外物能擾人、吾將息其端、歸
來湖中館、□戶聊自安。

石上閣

水石引我去、南湖復東壑、不厭隨竹陰、來登
石上閣、磴道通石門、欹崖斷如鑿、飛梁架峯
頭、天矯虹霓若、下視竹木杪、仰見懸泉落、水
聲兼松吹、音響參衆樂、時時爲霖雨、飄灑濕

水石の奇を愛するが爲めに、厭はず湖畔に行くを、曲石
島に登る毎に、則ち遠興の生ずる有り、戲差半湖し、宛か
も龍象の形の若し、又瑯琊臺の如し、□盤枕滄溟に、枕み、醉
人島に入りて來る、醉を將て強ひて醒と爲し、船を扣い
て復た棹を搖かす、漁夫の聲を歌ふを學ぶ、我を呼んで
酒船に上る、更に深し江海の情。

望遠亭 第五第十二句俱
に一字を缺く。

湖に泛んで水戲に勞す、飲漱清澗を厭ふ、來り登る望遠
亭、心目又閑ならず、孤峰座□に入り、高嶺前軒に横はる、
更に復た長風に歡す、蕭寥たり聽戸の間、外物能く人を
擾す、吾將に其端を息めんとす、歸り來る湖中の館、□戶
聊か自ら安んず。

石上閣

水石我を引いて去る、南湖復た東壑、厭はず竹陰に隨ふ
を、來り登る石上の閣、磴道石門に通じ、欹崖斷えて鑿の
如し、飛梁峯頭に架す、天矯虹霓の若し、下し視る竹木の
杪を、仰ぎ見る懸泉の落つるを、水聲松吹を兼ね、音響衆
樂に參す、時々霖雨の爲に、飄灑鏗箔を濕す、吾れ響響を

靡筮吾欲棄管經於茲守恬真

同前第三第十五句、俱缺二字。

石上構層閣、便以石爲柱、千載□棟梁、豈有傾危懼、苦壁絕人蹤、虹橋橫鳥路、攀涉愜所懷、幽奇未嘗遇、迥然半空裏、物象競相助、雲外見孤峯、林端懸瀑布、引望無不通、茲焉倍多趣、徒□欲忘歸、衣裳濕煙霧。

海陽湖

吾漲海陽泉、以爲海陽湖、千峯在水中、狀類皆自殊、有如三神山、蒼蒼海上孤、又似洲島中、忽然見龍魚、引船過石間、隨興得所如、每有愜心處、沈吟復躊躇、吾恐天地間、怪異如此無。

同前缺三第、四句。

全唐詩選下冊

棄て、茲に恬真を守らんと欲す。

前に同じ第三第十五句、俱一字を缺く。

石上層閣を構ふ、便ち石を以て柱と爲す、千載□棟梁豈傾危の懼れ有らんや、苦壁人蹤を絶ち、虹橋鳥路に横ふ、攀涉懐ふ所に愜ひ、幽奇未だ嘗て遇はず、迥然半空の裏、物象競うて相助く、雲外孤峯を見る、林端瀑布懸る、望を引いて通ぜざる無し、茲に倍、多趣、徒□歸るを忘れんと欲し、衣裳煙霧に濕ふ。

海陽湖

吾れ海陽泉を漲し、以て海陽湖と爲す、千峰水中に在り、狀類皆自ら殊なり、三神山の如き有り、蒼々として海上に孤なり、又洲島の中に、忽然として龍魚を見るに似たり、船を引いて石間を過ぎ、興に随つて如く所を得たり、心に愜ふ處有る毎に、沈吟復た躊躇す、吾れ恐らくは天地の間、怪異此の如きや無や。

前に同じ第四句を缺く。

五三

閑遊愛湖廣湖廣疊怪石廻合萬里勢□□
 □□綠動若無底波澄涵雲碧銜水復何
 如昆池吾不易茲境多所向親鄰道與釋外
 望雖異門中間不相隔開鑿盡天然智者留
 奇跡我願長此遊誰言一朝夕。

盤石

海陽泉上山巉巖盡殊狀忽然有平石盤薄
 千峰上寒泉匝石流懸注幾千丈有時厭泉
 湖愛臨一長望意出天地間因爲逸民唱。

同前第四句缺二字、第十句缺四字。

下山復上山山勢凌雲空有石圓且平疑是
 □□功清淺繞細泉陰森倚長松漠漠生青
 苔亭亭對遠峯朝來暮未歸愛□□□□。

湖下溪第三句缺三字、第五句缺一字。

閑遊湖の廣きを長す湖は廣して怪石叢る廻合す萬里の勢□□□□□□緑は動いて底無きが若く波は澄んで雲碧を涵す銜水復た何如昆池も吾れ易えず茲の境多く尙ぶ所親鄰す道と釋と外望異門と雖も中間相隔てず開鑿盡く天然智者奇跡を留む我願はくは此の遊びを長くせん誰れか言ふ一朝夕と。

盤石

海陽泉上の山巉々盡く殊狀忽然平石有り盤薄千峰の上寒泉石を匝つて流る懸注す幾千丈時有つて泉湖を厭ひ愛臨一たび長望す意ふ天地の間を出でて因つて逸民の唱と爲さん。

前に同じ第四句二字を缺く、第十句四字を缺く。

山を下つて復た山に上る山勢雲空を凌ぐ石有り圓くして且つ平かなり疑ふらくは是れ□□の功清淺細泉を繞らし陰森長松に倚る漠々青苔を生じ亭々遠峰に對す朝來暮未だ歸らず愛□□□□□。

湖下溪第三句三字を缺く、第五句一字を缺く。

海陽湖下溪夾峯多異石數歩□□□溶溶似雲白竹陰入□裏更覺溪已碧吾欲漱斯流長爲避時客。

同前

湖水下爲溪溪小趣更幽窈窕林中廻清冷石上流掩映成碧潭遊戲見白鷗岸傍古樹根往往疑潛虬野情隨所適世事何沈浮。

夕陽洞

順山高幾許亭亭似人蹲左右自廻抱抱中有清源異石匝階墀巉巖快四軒憑几見城邑峰當石門自從得茲洞愛之忘朝昏吾欲老於此便爲海陽人誰爲高世者與我能修鄰。

遊海門峽第九句缺一字

金唐詩選下冊

海陽湖下の溪峯を夾んで異石多し數歩□□□溶々と
して雲に似て白く竹陰入□裏更に覺ゆ溪已に碧なる
を吾れ斯の流れに漱いで長く時を避くるの客と爲ら
んと欲す。

前に同し

湖水の下溪と爲る溪小にして趣き更に幽なり窈窕と
して林中に廻り清冷石上に流る掩映碧潭を成し遊戲
白鷗を見る岸は傍ふ古樹の根往々にして潛虬かと疑
ふ野情適く所に隨ふ世事何ぞ沈浮するや。

夕陽洞

順山高さ幾許亭亭として人の蹲するに似たり左右自
ら廻抱し抱中清源有り異石階墀を匝る巉々四軒快な
り几に憑つて城邑を見る一峰石門に當る茲の洞を得
しより之を愛して朝昏を忘る吾れ此に老して便ち海
陽の人と爲らんと欲す誰れか高世を爲す者ぞ我と能
く鄰を修せん。

海門峽に遊ぶ第九句一字を缺き

五五

沿流二十里、始到海門山、仰視見兩崖、有如
 萬蓋懸、遂上幾千仞、猶未窮、絕巔、上有外士
 家、半巖、得湖泉、湖□昏且來、意其通海焉、忽
 此見靈怪、物屬不能旋、開襟當海風、目送歸
 海船、恨不到羅浮、丹溪尋列仙、這恨常。

句以下並見
 千載佳句。

月知溪靜尋常入、雲愛山高且暮歸、懷風吹
 帆席隨雲卷、鳥厭花枝覆水低、登李端中匹馬
 路傍乘月別、孤帆波上入雲飛、情即事別賦踴場邊
 芳草短、鞦韆樹下落花多、寒食書看樹只愁
 花落盡、聽鶯不覺馬行遲、途中攜樽藉草情
 無極、對水看雲興有餘、謝公等江文戰不曾
 眉得白、酒醒長覺面先紅、寒風裏一聲天上
 落、世人皆向五雲看、詠仙花又別三千歲、暮

流れに沿ふ二十里、始めて到る海門山、仰視兩崖を見る、
 萬蓋の懸るが如き有り、遂ひ上る幾千仞、猶未だ絶巔を
 窮めず、上に外士の家有り半巖湖泉を得たり湖□昏且來
 る、意ふ其の海に通じて、忽ち此に靈怪を見るを、胸躍旋
 ること能はず、襟を開いて海風に當る、目送す歸海の船、
 恨むらくは羅浮に到り丹溪に列仙を尋ねざるを、遺恨常

句以下並びに千載
 佳句に見ゆ。

月は溪の静かなるを知つて尋常に入り、雲は山の高きを
 愛して且暮に歸る、懷風は帆席を吹いて雲に随つて卷
 き、鳥は花枝を壓して水を覆うて低る、李端の嶺中に匹馬
 路傍月に乘じて別れ、孤帆波上雲に入つて飛ぶ、別賦踴
 場邊芳草短く、鞦韆樹下落花多し、寒食情を書樹を看て只
 愁ふ花の落ち盡くすを鶯を聽いて覺えず馬の行く遅きを
 憂ふ、途中携へ草を藉き情極りなし、水に對し雲を見
 て興餘り有り、謝公等江文戰會て眉白きを得ず、酒醒長く
 覺ゆ面先づ紅、寒風裏の一聲天上より落ち、世人皆五雲
 に向つて看る、詠仙花又別の三千歲、暮雨已に迷ふ十
 二峰、王溪先生滿枝露を帯びて將た何か似たる、會て見る

雨已迷十二峯、王、王、先生、滿枝帶露將何似、曾

見瓊樓素面啼、白芍、翠葉偃風如剪彩、紅花

含露似啼妝、書、青蘿帶霧依松古、綠竹含煙

泛水光、夏晚題、東、郊別業、書吏優遊山色裏、琴堂閑

冷水聲中、贈、臨安、鐘鳴月下長洲苑、露濕殘

花鳥亂啼、春日、吳門、花攢屋上紅珠顆、笋滿籬

根紫玉簪、書、花舞野塘鋪地錦、鳥鳴江樹送

春聲、府明、後、

遊仙窟詩 舊、戲、詩、七、十、八、首、狼、裘、淫、僻、疑、手、

贈崔十娘

張文成

今朝忽見渠姿首、不覺殷勤著、心口令人頻

作、許叮嚀、渠家太劇難、求守端坐剩心驚、愁

來益不平、著時未必相著死、難時那許太難

生、沈吟處、幽室相思轉成疾、自恨往還疎、誰

全唐詩逸下冊

瓊樓素面啼、白芍、翠葉偃風如剪彩、夏晚題、東、郊別業、紅花露
を含で啼妝に似たり、書、青蘿霧を帯びて松に依つて

古り、綠竹煙を含んで水に泛んで光る、臨安、書吏は遊る月

優遊山色の裏、琴堂閑冷水聲の中、春日、吳門、花は攢

下長洲の苑、露は濕うて殘花鳥亂れ啼く、書、花は野塘

む屋上の紅珠顆、笋は滿つ籬根の紫玉簪、書、花は野塘

に舞う地に鋪くの鋪鳥は紅樹に鳴く春を送るの聲
府明、後、

遊仙窟の詩 舊と詩七十八首を載す、狼裘淫僻、雅を傷る、

崔十娘に贈る

張文成

今朝忽ち渠の姿首を見る、覺えず殷勤心口に著く、人を

して頻りに許の叮嚀を作さしむ渠が家太劇求守し難し

端坐剩ち心驚く、愁ひ來つて益不平なり、著する時未だ

必らずしも死に相著せず、難む時那許太だ生じ難し、沈
吟幽室に處り、相思よて轉た疾を成す、自ら恨む往還の

五七

宵交遊密、夜夜空知心失眼、朝朝無便投、膠漆圓裏花開不避人、關中面子翻羞出、如今寸步阻天津、伊處留心更覓新、莫言長有千金面、終歸變作一抄塵、生前有日但爲樂、死後無春更著人、祇可偕伴一生意、何須負持百年身。

又贈十嬢

薰香四面合、光色兩邊披、錦障翻然卷、羅帷垂半欹、紅顏雜綠黛、無處不相宜、豔色浮粧粉、含香亂口脂、彎欺蟬鬢非成鬢、眉笑蛾眉不是眉、見許實娉婷、何處不輕盈、可憐嬌裏面、可愛語中聲、婀娜腰支細細許、賺話眼子長長馨、巧兒舊來雋未得、畫匠迎生摸不成、相著未相識、傾城復傾國、迎風幟子鬱金香。

疎なるを、誰か背て交遊を密にせん、夜々空しく心の眼を失ふを知る、朝々膠漆を投するに便無し、圓裏花は開いて人を避けず、關中の面子翻つて出づるを羞づ、如今寸步天津を阻つ、伊れの處か心を留めて更に新を覓めん、言ふ莫れ長く千金の面有りと、終歸變じて一抄の塵と作る、生前日に、但だ樂を爲す有り、死後春の更に人に著く無し、祇に一生の意を偕伴す可し、何ぞ須ひん百年の身を負持するを。

又十嬢に贈る

薰香四面に合す、光色兩邊に披く、錦障翻然として卷き、羅帷半を垂れて欹つ、紅顏綠黛を雜へ、處として相宜からざるは無し、豔色粧粉を浮べ、香を含んで口脂を亂る、鬢は蟬鬢の、鬢を成すに非ざるを欺き、眉は蛾眉の是れ眉ならざるを笑ふ、見る許りにして實に娉婷、何れの處か輕盈ならさん、憐む可し嬌裏の面、愛す可し語中の聲、婀娜腰支細々許、賺話眼子長々馨、巧兒舊來雋るも未だ得ず、畫匠迎へ生ずるも摸して成らず、相著くに未だ相識らず、城を傾け復た國を傾く、風を迎ふるの幟子は鬱金の香あり、日に照らすの裙裾は石榴の色なり、口上の

照日裙裾石榴色、口上珊瑚耐拾取、頰裏芙蓉堪摘得、聞名腹肚已猖狂、見面精神更迷惑、心肝恰欲摧、踊躍不能裁、徐行步步香風散、欲語時時媚子開、歷疑織女留星去、眉似姮娥送月來、含嬌窈窕迎前出、忍笑婆娑返卻回。

詠崔五嫂

奇異妍雅貌、特驚新眉間、月出疑爭夜、頰上華開似鬪春、細腰偏愛轉、笑臉特宜嘖、真成物外奇稀物、實是人間斷絕人、自然能舉止、可念無比方、能令公子百重生、巧使王孫千迴死、黑雲裁兩鬢、白雪分雙齒、織成錦繡駢、驥兒判繡裙、腰繫鸚鵡子、觸處盡開懷、何曾有不佳、機關大雅妙、行步絕娃傍、婦人一一丹

珊瑚は拾取に耐へたり、頰裏の芙蓉は摘得に堪へたり、名を聞いて腹肚已に猖狂、面を見て精神更に迷惑、心肝恰も摧けんと欲す、踊躍裁する能はず、徐行歩々香風散じ、語らんと欲して時々媚子開く、歷は織女の星を留めて去るかと思はれ、眉は姮娥の月を送つて來るに似たり、嬌を含んで窈窕迎へて前み出で、笑を忍んで婆娑返つて却り回る。

崔五嫂を詠す

奇異妍雅貌、特に驚新、眉間月出でて夜を争ふかと疑ふ、頰上華開て春を鬪はすに似たり、細腰偏に愛轉し、笑臉特に頰に宜し、真成物外奇稀の物實に是れ人間斷絶の人、自然能く舉止す、念ふべし比方無し、能く公子をして百重生せしめ、巧みに王孫をして千迴死せしむ、黑雲兩鬢を裁し、白雪雙齒を分つ、錦繡に駢駢兒を織成し、裙腰に鸚鵡子を判繡す、觸ると處盡く懷を開く、何ぞ會て佳ならざる有らん、機關大雅妙、行步絶え娃傍、婦人一一丹羅襪侍婢、三三綠線鞋、黃龍は透つて黃金劍に入り、白燕

は飛んで白玉釵に来る。

羅襪侍婢三三綠線鞋、黃龍透入、黃金釧、白
燕飛來、白玉釵。

詠雙樹

雙樹を詠す

新華發兩樹、分香遍一林、迎風轉細影、向日
動輕陰、戲蜂時隱見、飛蝶遠追尋、承聞欲採
摘、若箇動君心。

新華兩樹に發く香を分つて一林に遍し、風を迎へて細影轉じ、日に向つて輕陰動く、戲蜂時に隱見し、飛蝶遠く追尋す、承聞す採摘して、若箇か君が心を動かさんと欲す。

同前答文成

崔十娘

前に同じ、文成に答ふ

崔十娘

暫遊雙樹下、遙見兩枝芳、向日俱翻影、迎風
竝散香、戲蝶扶丹夢、遊蜂入紫房、人今總摘
取、各著一邊箱。

暫く雙樹の下に遊び遙かに見る兩枝の芳、日に向つて俱に影を翻し、風を迎へて竝びに香を散す、戲蝶丹夢を扶け、遊蜂紫房に入る、人今總て摘り取る、各よ一邊の箱に著かん。

詠花

張文成

花を詠す

張文成

風吹遍樹紫、日照滿地丹、若爲交暫折、攀就
掌中看。

風は吹いて樹紫に遍く、日は照らして地丹を滿たす、若爲ぞ交よ暫く折り攀けて掌中に就いて看ん。

同前

崔十娘

前に同じ

崔十娘

映水俱知笑、成蹊竟不言、即今無自在、高下任渠攀。

遊後園

張文成

昔時過小苑、今朝戲後園、兩歲梅花匝、三春柳色繁、水明魚影靜、林翠鳥歌喧、何須杏樹嶺、即是桃花源。

同前

崔十讓

梅蹊命道士、桃澗佇神仙、奮魚成大劍、新龜類小錢、水涓唯見柳、池曲且生蓮、欲知賞心處、桃花落眼前。

同前

崔五嫂

極目遊芳苑、相將對花林、露淨山光出、池鮮樹影沈、落花時泛酒、歌鳥或鳴琴、是時日將夕、欄楯就樹陰。

水に映じて俱に笑ふを知り、蹊を成して竟に言はず、即今自在無し、高下渠の攀づるに任す。

後園に遊ぶ

張文成

昔時小苑を過ぐ、今朝後園に戯る、兩歲梅花匝る、三春柳色繁し、水明かにして魚影靜かに、林翠にして鳥歌喧し、何ぞ杏樹嶺を須ひん、即ち是れ桃花源。

前に同じ

崔十讓

梅蹊には道士を命じ、桃澗には神山を行ふ、奮魚大劍を成し、新龜小錢に類す、水涓唯柳を見る、池曲且つ蓮を生ず、賞心の處を知らんと欲す、桃花眼前に落つ。

前に同じ

崔五嫂

目を極めて芳苑に遊ぶ、相將みて花林に對す、露は淨うして山光出で、池は鮮かにして樹影沈む、落花時に酒に泛び、歌鳥或は琴を鳴らす、是の時將に夕ならんとし、楯を攜へて樹陰に就く。

代・蜂子答十嬢

張文成

觸處尋芳樹、都盧少物華、試從香處覓、正值
可憐花。

別・文成

崔十嬢

別時終是別、春心不值春、羞見孤鸞影、悲看
一騎塵、翠柳開眉色、紅桃亂臉新、此時君不
在、嬌鸞弄殺人。

同前

崔五嬢

此時經一去、誰知隔幾年、雙鳥傷別緒、獨鶴
慘離枝、怨起移醒後、愁生落醉前、若使人心
密、真惜馬蹄穿。

別・十嬢

張文成

忽然聞道別、愁來不自禁、眼下千行淚、腸懸
一寸心、兩劍俄分匣、雙鳥忽異林、慙慙惜玉

蜂子に代つて十嬢に答ふ

張文成

處に觸れて芳樹を尋ぬ、都盧物華少し、試みに香處に從
つて覓む、正に可憐の花に値ふ。

文成に別る

崔十嬢

別時終に是れ別る、春心春に値はず、羞づらくは孤鸞の
影を見るを、一騎の塵を看るを悲む、翠柳眉色を開き、紅
桃臉新を亂る、此の時君在らず、嬌鸞人を弄殺す。

前に同じ

崔五嬢

此の時一去を經、誰れか知らん幾年を隔つ、雙鳥別緒を
傷み、獨鶴離枝を慘む、怨は起る塵を移すの後、愁は生ず
醉を落すの前、若し人心をして密ならしめば、馬蹄の穿
つを惜む莫かれ。

十嬢に別る

張文成

忽然別を道ふを聞くに、愁ひ來つて自ら禁へず、眼は千
行の涙を下だし、腸は一寸の心を懸けたり、兩劍俄かに
匣を分つ、雙鳥忽ち林を異にす、慙慙玉體を惜んで、外人

體、勿使外人侵。

揚州青銅鏡留與十娘

仙人好負局、隱士屢潛觀、映水菱光散、臨風竹影寒、月下時驚鵲、池邊獨舞鸞、若道人心變、從渠照膽看。

手中扇贈文成

崔十娘

合歡遊璧水、同心侍華闌、颯颯似朝風、團團如夜月、鸞姿侵霧起、鶴影排空發、希君掌中握、勿使恩情歇。

送張郎

香兒

丈夫存行跡、慙慙爲數來、莫作浮萍草、逐浪不知廻。

贈十娘

張文成

人去悠悠隔兩天、未審迢迢度幾年、縱使身

をして侵さしむる勿れ。

揚州青銅鏡十娘に留與す

仙人負局を好む、隱士屢に觀る、水に映じて菱光散じ、風に臨んで竹影寒し、月下時に鵲を驚かし、池邊獨り鸞を舞はず、若し人心變すと道はと、渠に従つて膽を照して看よ。

手中扇文成に贈る

崔十娘

合歡璧水に遊ぶ、同心華闌に侍す、颯々朝風に似たり、團團夜月の如し、鸞姿霧を侵して起り、鶴形容を排して發す、希くは君が掌中の握、恩情をして歇ましむる勿れ。

張郎を送る

香兒

丈夫行跡を存す、慙慙數來を爲せ、浮萍草と作つて、浪を逐うて廻るを知らざる莫れ。

十娘に贈る

張文成

人は去つて悠悠兩天を隔つ、未だ審かにせず迢々幾年を

遊萬里外終歸意在十孃邊。

答文成

崔十孃

天涯地角知何處、玉體紅顏難再遇、但令翹羽爲人生、會些高飛共君去。

李綱雜詩百二十首、全唐詩所載、缺文頗多、今照此邦所傳古本補書之、以附此。

原舊、隴、隴、二、字、下、葦、作、吉。

王粲銷憂日、江淹起恨年、帶川遙綺錯、分隰迴阡眠、廡廡橫周甸、莓莓闕晉田、方知急難響、長在鵲鴿簫。

河舊、隴、二、字、下、葦、作、吉。

河出崑崙中、長波接漢空、桃花生馬頰、竹箭入龍宮、德水千年變、榮光五色通、若披蘭葉檢、還沐上皇風。

檄舊、隴、二、字、下、葦、作、吉。

遊る、難使ひ身は萬里の外に遊ぶも、終歸意は十孃の邊に在らん。

文成に答ふ

崔十孃

天涯地角知る何の處ぞ、玉體紅顏再び遇ひ難し、但翹羽をして人の爲に生ぜしめば、會些高く飛んで君と共に去らん。

李綱雜詩百二十首、全唐詩載する所、缺文頗る多し、今此邦傳ふる所の古本に照し之を補書して以て此に附す。

原舊、隴、二、字、下、葦、作、吉。

王粲憂を銷するの日、江淹恨を起すの年、帶川遙かに綺錯、分隰迴かに阡眠、廡廡周甸に横ふ、莓莓晉田を闕く、方に知る急難の響き、長く鵲鴿の簫に在り。

河舊、隴、二、字、下、葦、作、吉。

河は崑崙の中を出で、長波漢空に接す、桃花馬頰に生じ、竹箭龍宮に入る、德水千年に變じ、榮光五色通ず、若し蘭葉を披いて檢せば、還た沐せん上皇の風。

檄舊、隴、二、字、下、葦、作、吉。

羽檄本宣明、由來敷木聲、聯翩通漢國、迢遞入燕營、毛義持書去、張儀驅壁行、曹風雖覺、愈陳草始知。

戈 舊缺
善字。

富父春喉日、殷辛漂杵年、曉霜含白刃、落影駐瑠鏡、夕攢金門側、朝提玉塞前、願隨龍影度、橫陣慧雲邊。

簫 舊缺、下四句、
猿吟作二人心。

虞舜調清管、王褒賦雅音、參差鳳翼、搜索動猿吟、靈鶴時來到、仙人幸見尋、爲聽楊柳曲、行役幾傷心。

素 舊缺、灑手天
津魚腸六字。

灑手天津女、織腰洛浦妃、魚腸遠方至、鴈足上林飛、妙奪絞綃色、光騰月扇輝、非君下路

羽檄本宣明、由來敷木聲、聯翩漢國に通じ、迢遞燕營に入る、毛義書を持して去り、張儀壁を驅んで行く、曹風愈を覺ゆと雖も、陳草始めて名を知らる。

戈 舊、善の字
を缺く。

富父喉を春くの日、殷辛杵を漂はす年、曉霜白刃を含み、落影瑠鏡を駐む、夕に攢す金門の側、朝に提ぐ玉塞の前、願くば龍影に随つて度り、横陣慧雲の邊。

簫 舊、下の四句を缺く、
猿吟人心に作る。

虞舜清管を調す、王褒雅音を賦す、參差鳳翼を横へ、搜索猿吟を動かす、靈鶴時に來り到る、仙人幸に尋ねらる、爲に聽く楊柳の曲、行役幾たびか心を傷ましむ。

素 舊、灑手天津魚
腸の六字を缺く。

灑手天津の女、織腰洛浦の妃、魚腸遠方より至る、鴈足上林に飛ぶ、妙は絞綃の色を奪ひ、光は月扇の輝を騰ぐ、君

全唐詩逸 下冊終

が路を下り去るに非ずんば、離れか賞せん故人の機。